

『土木学会四国支部「土木紀行」No.42』（香川県）

高松港

高松港というとき皆さんは何を思いだすでしょうか。たぶん若い人は、サンポート高松にあるサンポートタワー、国道フェリー、赤レンガ灯台、四国の玄関口と色々あるでしょうが、やはり高松港と言えば宇高連絡船でしょうか。今年は、宇高航路が開設されて100周年という節目を向えました。これにともないサンポート高松を中心に5月22日から6月13日にかけて、船の祭典2010が開催されました。そこで、今回はあらためて高松港について紹介します。

高松港は、香川県の中央部よりやや東に位置しており、東は阪神より約137km、西は関門より約331km、北は宇野より約18kmに位置し、本州と四国を結ぶ海上交通の要衝として、商業および観光港の機能だけでなく、工業的性格を有した港湾として発展してきている。港湾区域としては、高松市屋島西町長崎の鼻、女木島帆檣の鼻及び生島町紅峰東北端（五色台の側）を結んだ線と詰田川、春日川の河口部までの約31,000,000m²の海域に、サンポート高松の在る玉藻地区、高松港コンテナターミナルの在る旭地区をはじめ屋島地区、西浜地区、弦打地区、香西地区、神存地区、生島地区の8地区があり最大総トン数20,000G/Tの船舶が停泊することが可能です。

ここで高松港の主な変遷を紹介します。高松港は、天正16年（1588年）に生駒親正が日本3代水城の高松城を築き、同時に内町港を築いたのが始まりです。当時の様子は、香川県歴史博物館所蔵の『高松城下図屏風（たかまつじょうかずびょうぶ）』から知ることができます。その後、明治30年以降本格的に整備が始まり、明治34年に宇野～高松間の鉄道連絡線が就航しました。大正11年からの工事により昭和時代の原型が整えられ、昭和36年からの拡張工事が行なわれ、平成13年5月にサンポート高松が開港しました。高松港からは、小豆島（土庄、草壁、池田）、直島、男木・女木島、大島、豊嶋、宇野、阪神神戸へ定期船が就航しており、小さな船旅を味わうことができます。

高松港の埋立て事業の歴史は古く、戦後の昭和25年より朝日地区を中心に、現在まで約170haの埋め立てが行なわれており、初期の造成地は臨海工業用地として東京製鐵等の企業



写真1 高松港西側の風景



写真2 ハーバープロムナード



写真3 旧高松港管理事務所

が立地しています。さらに中期以降に造成地においては、各種大型岸壁を有する商港として整備され、物流の中心となっています。朝日地区の高松コンテナターミナルからは、中国の大連・青島、上海、韓国の釜山への国際コンテナ定期航路が開設されており、そのコンテナ取扱い個数も順調に伸び、平成20年度は約35,000TEUの取扱量となっています。また、この地区は、東南海・南海地震などの大地震時の緊急物資輸送等の復旧拠点としての機能を強化するために、耐震強化岸壁や避難緑地等の整備を行ってきており、香川県立中央病院の移転先の候補地としても検討されています。このように発展してきた高松港は、四国地域及び環瀬戸内海交流圏の中核として発展していくことが期待されており、今後高松港湾地区を“物流基地ゾーン”，“拠点シンボルゾーン”，“第2物流産業ゾーン”，“環境改善ゾーン”，“海洋リクレーションゾーン”に分けて整備していく将来整備構想も提案されています。

現在では宇高連絡船が発着していた頃の港としての面影は、ほとんどありませんが旧高松港管理事務所が残っており、連絡線の高松棧橋に使用されていた積み石と連絡船「讃岐丸」の錨がサンポート地区内にあります。昭和時代の名残に関しては、まだまだあるようですので、興味のあるかたは、高松港管理事務所の高松港ホームページを見に紹介されていますので、実際に探して歩くのも良いかもしれません。また、今年、高松港では船の祭典2010だけではなく、7つの島と高松港周辺において7月19日～10月31日の間、瀬戸内国際芸術祭2010も開催されます。是非、昭和の面影を探しながらアートを巡ってみてください。個人的には、屋島から夏の夕日に照らされる高松港の風景が非常に気に入っております。



写真4 北浜の旧倉庫群と北浜プロムナード



写真5 宇高連絡船時代と現在の高松港の概略図

参考文献

- 1) 高松港要覧 平成18年度
- 2) 高松港ホームページ <http://www.pref.kagawa.jp/takamatsuko/index.htm>
- 3) 高松港コンテナターミナルホームページ <http://www.pref.kagawa.jp/kukokotsu/index.htm>